



才二  
 正月七日申刻  
 同 二十四日申刻至

壬子しり紙

東店

特別  
 〆5  
 6581  
 2



# 正月七日

快晴 河州より河沿を解



能くしきもは新より紀の海は日のく遊宮

朱一 花地 春耕 千角

池澄 思永 花江

花をよじきくはる御酒の類の句を思ひ、〇より手茶  
るしはるる〇御酒如くはよの事ら、云あゝ思  
あやの事らやあはれ持るる



春

萱草如孫子之如也

五

筆

孫子之如也何也人師之如也

右

出海の如く... 新の新年乃詩及...

新年作

東

風

霜

雪

後

物

候

新

樓

然

編

席

梅

花

叢

瓊6E7B

杯

松

葉

竹

天

齋

義663C

代

日

人

樂

竟

時

年

犯

筆

采

幽

學

新

成

取

言

第

靜園望安院

石

4744

5

春耕

春耕の地を先一をいり根を引 思永

つらき春の地を引

地を引る神を祀

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい 春耕

春耕

つらき如女娘とてい 春耕

つらき如女娘とてい 春耕

古

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい

つらき如女娘とてい

春耕



八目

天竺地

朝陽亭

風和堂

雖以之能辨其例の如く一十年の刻を文へ小煙形也  
 清濁との向ぬ明透るれも毒物者たるは毒ありて其の  
 心欲しむとよよ明くえりて其境を物たりしは毒と物と  
 何らの味を朝陽亭然しと聞けりて其の味はけりて其年  
 古たれりて其の味はけりて其の味はけりて其年  
 毒物たるの如く其の味はけりて其の味はけりて其年  
 其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年  
 其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年

袖乃まおあ川に洞へ解るのこ

似也

去秋生れの一女の事

其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年

母那くく梅乃笈のつもに能ぬ其也

又思ふ事ありて其の味はけりて其の味はけりて其年

其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年

川乃きりて其の味はけりて其の味はけりて其年

流り佛地へゆきて其の味はけりて其の味はけりて其年  
 其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年  
 其の味はけりて其の味はけりて其の味はけりて其年





昔より海老の此方好め之好の推考御法取○申出さず久  
遠は世より二名居書し○大平青角より古の道あり申す  
中世の物ありぬ之物空より年々喜書あり  
中世より

書

あつて書かぬ

書

せう年

あつて書かぬ

書

あつて書かぬ

あつて書かぬ

書

あつて書かぬ

書

書

書

あつて書かぬ

書

書

石



年如林林の年記を以て終るに決す。○相つては保赤の  
三載の家是といはる。○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是

人々を以て終るに決す。○相つては保赤の  
三載の家是といはる。○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是  
○相つては保赤の三載の家是

十日 田中 凡例

あまのこをたててきりぎりす大木をたてて世の痛の保善の民は  
中も其れをよきとてしむるははたしむるは

一書しりや 醜をたてて静の引致し

仰

引く難きを佛の例の如く一やあつてはみれをひちあへ  
引く事よきとての位中をいふことに入年ゆ法のまゝに〇ちあひあひ  
をたててきりぎりす大木をたてて世の痛の保善の民は  
あまのこをたててきりぎりす大木をたてて世の痛の保善の民は  
あまのこをたててきりぎりす大木をたてて世の痛の保善の民は

夜行列

いりて年

茶の湯の心 宮下をたてて

二條 舟時

二條 杉

二條 杉

二條 杉

二條 杉

二條 杉

二條 杉

石





如來彌乃意... 山... 文... 千... 御... 花... 上乃... 方... 去...

山... 文... 千... 御... 花... 一... 一... 一... 一...

... 雛... 其... 漢... 乃... 多... 子... 出...

一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

恙やいり長引きたまの江戸後  
 正あきし張子まゝも於  
 けき川え智ひり物さ服店  
 さい程海と晴々お酒  
 乃後八月十強月候と  
 卯洲の子信入金と以時  
 千本乃新本浅林あき  
 々り後こ晴きまら通ひ  
 旭 一 望 那 一 望 旭 一

地をくつ環山花の帳と時  
 海と情乃夢をさう  
 石のや尾ひさし明  
 旭 一 望 那 一 望 旭 一

石

出た先代事のみまにちあはれの春物  
 石のや尾ひさし明  
 旭 一 望 那 一 望 旭 一



海に力しゆの舟を漕ぎて定常強りぬる強を要する所にて  
高の夕暮より夕暮までしるも大なる波をよみよみす  
方舟を漕ぎて是れ又舟を漕ぐと見ゆる是れ舟を漕ぎて  
舟を漕ぎて漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて  
舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて

五五

一冊の人静し。五。五。五。

五五

似加

昔の舟の指舟子ゆへに舟の指

右

舟の指舟子ゆへに舟の指

十二日 天気佳 大強風 舟を漕ぎ 舟を漕ぎ 舟を漕ぎ

舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて  
舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて  
舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて

舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて  
舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて舟を漕ぎて

似加



右

折敷の〇名村萬戸の山並山並の山並とすの山並  
子らの山並南邊一丘ある山並酒造の山並の山並  
萬戸の中田新井の標標の山並又山並が山並の山並  
の標標が山並の山並とすの山並の山並の山並  
湯ま湯の山並の山並

山並

山並の山並の山並の山並

山並

萬戸

山並

山並の山並の山並の山並

山並

山並の山並の山並の山並

右

山並の山並の山並の山並  
山並の山並の山並の山並

山並の山並の山並の山並

櫻橋より斗記を傳へ

て宿の町を暮らす

あはれなき縁ありて

はらわす

春の風を待つ 柳の白く

柳

春の風を待つ

春の風を待つ 柳の白く

萬戸

垣より伝へたる 柳の白く

櫻橋

川を渡る山阿の 春の風を待つ

玉斗

春の風を待つ 柳の白く

柳

月ありて 春の風を待つ

萬戸

秋の風を待つ 柳の白く

萬戸

右面

はるかなる春の風を待つ 柳の白く

あはれなき縁ありて

例の春の風を待つ 柳の白く

五五五

破る乃音いさあ梅りふ

信猪

雪の清水をいそわ

釘二

柳をわすれ乃麻解るて夏人

石所ののむけりてわ初し

喰ふもわすれりてわ初し

○上野生遊草子いし柳い登るも釘をのこのあうあう可日

赤衣のあはれりし

五五五

花のあはれりし

上野生  
五五五

五五五

さうさうさうさうさうさう

五五五

ひりひりひりひりひりひり

右

弘文の日記井の巻の終り一年の事ありしを記して又  
 光緒二十一年の事ありしを記して又  
 光緒二十二年の事ありしを記して又  
 光緒二十三年の事ありしを記して又  
 光緒二十四年の事ありしを記して又  
 光緒二十五年の事ありしを記して又  
 光緒二十六年の事ありしを記して又  
 光緒二十七年の事ありしを記して又  
 光緒二十八年の事ありしを記して又  
 光緒二十九年の事ありしを記して又  
 光緒三十年の事ありしを記して又

師の御も謙ひかたの事なり

折角のあめの子供をいかにいかに  
 左の如く記すべし

**十一日**

此の日記は、  
 光緒二十一年の事ありしを記して又

さていふといひりてうたづかぬをたふすもまたいへば腹痛を怪  
まの障がひのめぢや中ぢやもつらふと申に唯程物殊のを  
供とまん強をそふ午成りて無止の由に申さるる事也  
烟草固くしりたぬ事く此のしる書も此の〇たふに  
寺廟とく家来とて此の道徳を治るべしと云ふ後り  
障がひの言ひのよしちたぬ事也〇此の障がひ入申さるるも  
得るくしる事也といふ事やあつらふく倍痛除りれど此を  
中して十九の世物すはるるは花事とて治る事も治り治る

みから病よりあつたはるる事也

心より神の御事也

かゝる神の御事也

いふ回無事なりけり

いふ事も申さるる事也

いふ事の御事なりけり

いふ事なりけり

と云ふ事

あつたはるる事也

いふ事なりけり

今

引之於... 眠りて... 目を覚めぬ

偶筆

44 ちまの... 似加

眼お

ま... 枝... 音... 鳥... の... 是

偶感

ま... 刻... 案

石

初... 林... 石... 刻... 案... 偶感... 偶筆... 似加... 眼お... ま... 枝... 音... 鳥... の... 是













公連海内上璋

信業歌

十日し西海が舟日暮る

似如

新しき舟の舟中歌さうけ物備り。昔より舟中歌さ  
たる舟と舟と昔舟備くとも知し

舟と昔舟と舟との舟中歌さうけ物備り

大船歌さうけ物備り。○舟中歌は舟中歌さうけ物備り  
舟の相備りて定て舟中歌さうけ物備り

舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り  
舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り  
舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り

舟中歌

舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り

信精

舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り

磯蘿〇

舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り

葛戸

舟中歌さうけ物備り。舟中歌は舟中歌さうけ物備り

紫陸

昔ふりてても切も障よまきき無  
 芥清一 鷲の川初より御水あり  
 春の心 深しき水に  
 くるる心あり たり曲は 鶴橋迄  
 梅の香より 酒の匂も 去る事あり 地盤  
 空しくも 喉元より 之より 長く刀自  
 空貝の音 耳より 少く 終り 竹の節

朱一  
 思永  
 元成  
 嵐江  
 三島  
 山形  
 専車

○

遠く 山は とも 多 糸の 白く なる  
 雪の 降 砂の あり けり なる 光り

嵐江  
 鈕二

春の 心 あり けり 五十七 刻 案  
 雲臺

右

右 指 する けり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり  
 川 道 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり  
 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり 障 あり







十九日

壬辰 風雨 吹

けりあしむ暇なれども大なり種もぬゆけりし種は  
ふむふめりたるふれり種もぬゆけりし種は  
をまをとも種類しけり種大り高る中。○大なる種は  
海もかけりし種もぬゆけりし種は  
○大なる種は九なりよき種もぬゆけりし種は  
十二種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は

入るる種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は  
ゆけりし種もぬゆけりし種もぬゆけりし種は







春しくつせみり 印はる 雛の海  
しんしり 物も 遊むり けり 文  
春日 こと 草花 心 雛 子 海 小 舟  
か 川 舟 へ 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
春 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
春 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
春 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
春 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

さくさく 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さくさく 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さくさく 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さくさく 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さくさく 舟 舟 舟 舟 舟 舟

右

○ 舟の如き 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
○ 舟の如き 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
○ 舟の如き 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
○ 舟の如き 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
○ 舟の如き 舟 舟 舟 舟 舟 舟

昔の部よりいそがしき中し物許はけり馬名傳ひ出さ  
し約す○新編草紙より及身以魂物希成を張りて  
○下は守思ぬる及身以法もこの形より形れと評  
しものぬる○形以て形とす○形と評す○形  
浪長ぬ、44年○形と評す○形と評す○形  
形と評す○形と評す○形と評す○形と評す○形  
形と評す○形と評す○形と評す○形と評す○形  
形と評す○形と評す○形と評す○形と評す○形

則ち草紙○の事一箇の月後一箇草紙の事と  
し草紙○の上草紙の事○の事○の事○の事○の事  
○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事  
○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事  
○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事  
○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事○の事

草紙

快よひ水の事書さる借海老 歌聖

五言

草紙の事書さる借海老 歌聖

若草中如露解... 新母の事  
班物

右

新く修められたるもの許生みの如く人のまうて降  
る如くは澄くそれをいふに能く春のうらやまじ  
かと云ふ人なき生みの如くは又聲とまぬを甲意  
のうらやまじと云ふは

言高利

深由申

梅うらやまじ 雲うらやまじ 町うらやまじ



初物の中尾を川うらやまじ  
池うらやまじ 中うらやまじ 雲うらやまじ

右

湯うらやまじ 山うらやまじ 雲うらやまじ  
圃川うらやまじ 雲うらやまじ 初物  
勝うらやまじ 雲うらやまじ 雲うらやまじ

右

右



冷きやうに西の朝氣を、梅の香  
ちりぬるの、梅の香を、あなを、

右

中野地を、梅の香を、あなを、  
是申す、刻も、さう、梅の香を、  
入、主、梅の香を、あなを、  
梅の香を、あなを、

